



日本統計学会 会報 2023.10.31 No. 197

発行——一般社団法人 日本統計学会
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル5F
公益財団法人 統計情報研究開発センター内 日本統計学会事務局
Tel & Fax : 03-3234-7738
編集責任——川崎 能典(理事長)／小山 慎介(庶務理事)
小西 葉子(広報理事)／浦沢 聡士(広報委員)
塚本 高浩(広報委員)
振替口座—00110-3-743886
銀行口座—みずほ銀行九段支店普通 1466879番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

- | | | |
|----------------------------------|-------------------------|---|
| 1. 巻頭随筆：明星大学「データサイエンス学環」の新設…………… | 富澤貞男・中川智之… 1 | …………… (賞の紹介) 川崎 茂…15 |
| 2. 統計学会各賞受賞者のことば…………… | | …………… 助田一晟…16 |
| 2.1 第28回日本統計学会賞…………… | 柿沢佳秀… 3 | …………… 若山智哉…16 |
| …………… | 富澤貞男… 4 | …………… 武石将大…17 |
| 2.2 第3回日本統計学会中村隆英賞… | 原田 泰… 6 | …………… 岡部格明…17 |
| …………… | 安田 聖… 7 | …………… 柚木慎太郎…18 |
| 2.3 第19回日本統計学会統計活動賞…………… | | 3. 第6回 細谷賞の公募 …… |
| …………… | 情報・システム研究機構 統計数理研究所… 8 | …………… 松田安昌…19 |
| 2.4 第19回日本統計学会統計教育賞… | 都丸希和… 9 | 4. 2022年7～12月統計検定 CBT 方式試験の成績 |
| …………… | 香川県立観音寺第一高等学校 FESTAT…10 | 優秀者…………… |
| 2.5 第17回日本統計学会研究業績賞… | 奥井 亮…11 | …………… 照井伸彦・川崎能典…19 |
| …………… | 青木 敏…12 | 5. 統計検定合格者の声…………… |
| 2.6 第37回日本統計学会小川研究奨励賞…………… | | …………… 照井伸彦・川崎能典…21 |
| …………… | 明石郁哉…13 | 6. 理事会・委員会報告(2023年7月1日開催)…23 |
| …………… | 松田孟留…14 | 7. 2023年役員・代議員協議会記録……………25 |
| 2.7 第3回 ISI 東京大会記念奨励賞…………… | | 8. 博士論文・修士論文の紹介……………25 |
| | | 9. 新刊紹介……………26 |
| | | 10. JSS Research Series in Statisticsからの新刊情報…26 |
| | | 11. 学会事務局から……………26 |
| | | 12. 投稿のお願い……………27 |

1. 明星大学「データサイエンス学環」の新設

富澤 貞男 (明星大学)
中川 智之 (明星大学)

明星大学(東京都日野市)では、学苑創立100年目である2023年4月に日本初の「データサイエンス学環」を新設しました。明星大学はワンキャンパスに理系・人社系・融合系の9学部12学科1学環を擁する総合大学です。キャンパス内は自然豊かで静かな環境です。また、2002年に第1回の統計関連学会連合大会が明星大学で開催されています。

計算機の発展に伴い、多くのデータが収集・解

析が可能になり、様々な分野でデータサイエンスの活用が進む中、データサイエンス人材の育成は重要性を増しています。2017年4月に滋賀大学に日本初のデータサイエンス学部ができて以降、日本各地の大学で続々とデータサイエンスが学べる学部・学科・コースが新設されています。明星大学においてもデータサイエンス教育の一翼を担うべく、篠原聡学環長の下、筆者らを含め5人の教員を中心に「データサイエンス学環」という新し

いかたのデータサイエンス教育をスタートさせました。

「学環」は聞き馴染みのない方も多いと思いますが、学部等を横断して学ぶことのできる新しい学位プログラムです。明星大学のデータサイエンス学環は、大学設置基準の改正により新たに設けられた「学部等連係課程」(※1)の制度を東京都内の大学(学部)で初めて活用し、既存の情報学部、理工学部、経済学部との緊密な連係・協力の下、学部横断的な学位プログラムを実施・運営する、学部の枠を超えた学部等連係課程実施基本組織です。

データサイエンスにおいては、基礎となる数学や統計学、機械学習、コンピュータサイエンスなどの知識は多くの分野で共通しています。一方、応用分野において必要な知識や手法は様々です。特に、データの分析を行う上で、数理的に正しい手法を用いることはもちろんですが、データに関するドメイン知識やデータの提供者とのコミュニケーションは必要不可欠です。そのため明星大学データサイエンス学環では、従来の「学部」でも「学科」でもなく、明星大学の1つのキャンパスにすべての学部・学科・学環があるという特色を生かして、データサイエンスを学びの中心に置き、情報学分野、理工学分野、経済学分野の学びを環状につなぎ、学部の垣根を越えて学べる「学環」という新しいカタチを構築しました。

本学環では数理科学・統計学・情報学を基盤とするデータサイエンスの専門知識と実践的な技術に加え、各分野での活用方法を学べるようにすることで、社会の様々な分野で活躍する人材を育成することを目指しています。また、この学環は明星大学が進める専門的学修「セントラル」と垣根を越える学修「クロッシング」、時代の要請する新たな課題の学修を実現した形の学びを提供しています。

本学環では、教養科目に加えて、専門科目は「基幹科目」「応用科目」「研究実践科目」の3つの科目区分を設け、データサイエンスについて体系的に学びます。「基幹科目」と「研究実践科目」は

主としてデータサイエンス学環が独自に開設する科目です。「基幹科目」は、1, 2, 3年生対象の科目で、数理科学、統計学、AI・機械学習、コンピュータサイエンスなどの科目を開設し、データサイエンスの基礎をしっかりと固めるカリキュラムになっています。例えば、統計学に関しては講義科目だけでも6科目(半期、うち必修4科目)開設し、統計学の基礎的な内容を学びます。「研究実践科目」は、2, 3年生を対象に「データサイエンスの演習」や「データサイエンス実践」という科目を用意し、講義で学んだ手法を用いて実際のデータの分析を行い、理論だけでは分からない問題に取り組むことができます。実際に学内外から頂いたデータを用いて実践的なデータサイエンスをチームで行い、コミュニケーション力や共同で仕事をするスキルを育成することを目指しています。「応用科目」は既存の3学部の専門科目からなります。2, 3, 4年生で各学部の専門科目を受講することができ、学生自身が自分の進みたい分野の内容を各学部の学生たちと共に学ぶことができます。具体的には、「自然言語処理」や「オーディオプロセッシング」などの情報学分野、「宇宙工学入門」や「地球環境学」などの理工学分野、「計量経済学」や「都市経済学」などの経済学分野の科目を用意しており、データサイエンスの幅広い応用先を学生自身が選択できるようになっています。なお、卒業に必要な単位数の少なくとも15%は連係協力学部の専門科目からなり、応用分野を専門的に学べるのも特徴です。また、連係協力学部からも含めて総勢21名の教員が参画しており、卒業研究ではこれらの教員の指導を受けることができます。

本学環は1学年定員30名であり、「きめ細かい教育」ができるという点が大きな特色です。少人数の良さは学生との距離も近く学生たちも分からないところを質問しやすく、また教員もどこがわかっていないのかを確認しながら進めることができます。本年4月にデータサイエンス学環へちょうど30名が第1期生として入学してきて、半年近くになります。筆者らは「統計学1」(1年次対

象)の講義を前期に行いました。高校の数学を十分に学んでない学生も何人かいますので、講義では高校で学んだかどうか確認しながら、必要に応じて丁寧な説明を加えながら進めることができるのは少人数ならではのと思います。またデータサイエンス学環の教員は、学生と授業以外でも積極的に話す機会を設けることを心がけています。学生と教員が良好なコミュニケーションを保ちながらデータサイエンス学環の教育を進めることに心がけています。8月上旬の定期試験終了後に学環学生と教員で懇親会(意見交換会)も開催しました。学生と教員がコミュニケーションを積極的にとることで学生は教員に質問しやすく、教員は学生の理解度を把握できます。また、講義内容や進め方の意図を伝えることができ、学生と教員が一緒に講義を作ることができていると思います。

人材育成や研究活動を通し、東京都多摩地域を

中心として、データサイエンスの視点から社会貢献を行い、さらに地域を含めた世界の人々と共創する「学環」を目指します。今後は、明星大学データサイエンス学環を魅力ある学環に成長させるべく、教職員で力を合わせていきたいと思います。明星大学データサイエンス学環について詳しく知りたい方は次のページを参照ください。

<https://www.meisei-u.ac.jp/special/ds2023/>

(※1) 令和元年8月に改正された大学設置基準により新たに学部等連係課程実施基本組織の制度が導入されました。この制度は、大学に置かれる複数の学部との緊密な連係及び協力の下、複数の学部が有する教員組織及び施設設備等の一部を用いて横断的な分野に係る教育課程を実施する学部以外の基本組織(「学部等連係課程実施基本組織」という)を置くことが可能というものです。この制度を用いて明星大学では「データサイエンス学環」を新設しました。

2. 統計学会各賞受賞者のことば

2023年9月4日、統計関連学会連合大会において、日本統計学会各賞の表彰式がありました。日本統計学会各賞の受賞者のみなさまから、受賞のことばをいただきましたので、以下の順にご紹介させていただきます。

- ・第28回日本統計学会賞：柿沢佳秀氏、富澤貞男氏
- ・第3回日本統計学会中村隆英賞：原田泰氏、安田聖氏
- ・第19回日本統計学会統計活動賞：情報・システム研究機構 統計数理研究所
- ・第19回日本統計学会統計教育賞：都丸希和氏、香川県立観音寺第一高等学校 FESTAT
- ・第17回日本統計学会研究業績賞：奥井亮氏、青木敏氏
- ・第37回日本統計学会小川研究奨励賞：明石郁哉氏、松田孟留氏
- ・第3回 ISI 東京大会記念奨励賞：助田一晟氏、若山智哉氏、武石将大氏、岡部格明氏、柚木慎

太郎氏

2.1 第28回日本統計学会賞 受賞のことば

柿沢 佳秀(北海道大学)



このたびは、第28回日本統計学会賞を授与していただき、大変光栄に存じております。推薦いただいた先生、選考委員会の先生方、会長・理事長・関係の皆様、そして、今までご指導いただいた多くの先生に心より御礼を申し上げます。

私がこれまで関わった研究を少し振り返ります。

1) 谷口正信先生のご指導の下の大阪大学大学院基礎工学研究科の院生～北大赴任の数年ぐらい(91年から約10年間)は定常時系列過程の推測理

論、特に、正規自己回帰過程などを中心に（漸近展開を含み）多くを学びました。その間、周波数領域でピリオドグラム（行列）平滑化から勉強しました。非母数的アプローチはどのモデルに対しても重要ですので、この頃から、ノンパラメトリック法の世界へと魅了されていたのかもしれません。

2) 97年頃から約10年間（先輩である岩下登志也氏と共同研究を含み）、東京理科大学時代の恩師の塩谷實先生の微分作用素を使用した多変量統計量の漸近展開導出（1956,1971;AISM,AMS）を非正規性へ拡張する研究に取り組みました。当時の少しのエピソードは、第2回日本統計学会研究業績賞を頂戴したときの会報記事 No.137をご参照ください。この頃に、漸近展開計算の肝を訓練できたかなと感じており、この期間の研究蓄積なくして、4)は成し得なかったと思います。

3) 02年に、ベルンシュタイン多項式による密度推定量の Babu et al. (2002;JSPI) を読んだことが動機で境界バイアス問題への関心が高まりました。当時は、スペクトル密度推定を意識していたのですが、スペクトル密度の周期性から確率密度関数推定の題材からも論文をまとめました。この頃の研究着想は、後述する5)以降に甦りました。

4) 2)のような漸近展開研究は07年から約8年間におけるパートレット型調整、及び、局所検出力を比較する問題へと継続的に試行錯誤されました。ここでパートレット型調整とは、1991年の異なる3論文からのカイ2乗近似を改良する方法ですが、谷口先生によるスカラー母数の単純帰無仮説検定の論文（JMVA）を局外母数の存在の下でリバイバルしましたが、これについて回想すると院生時代に谷口先生の土曜セミナーの講演を聴く機会があり、その頃から長い間、頭の片隅に置いていたことが解かれ私の中で一区切りがついたのかなと思うも束の間、フィッシャー尤度型原理に相当する経験尤度型を通じノンパラメトリック推論する豊富な題材に辿り着きました。いつか取り組みたいものもありますが、私の不勉強から理解不足なことも多く、これ以上を触れないことに

しましょう。

歴代の受賞者のお名前を拝見しますと、大きな業績をあげられ、かつ、次世代の研究者育成にも多大な貢献のある方々が並び恐縮しておりますが、微力ながら博士課程の2名学生への指導[五十嵐岳（12年～14年）、曾小強（21年～）]を通じ、私自身も刺激を受け、下記の2つを進めて参りました。

5) 非対称カーネル法（一部は五十嵐さんとの共同研究）に関し、当初は、ベルンシュタイン多項式密度推定量の高次バイアス修正、Chen（1999, 2000;CSDA,AISM）のベータ・ガンマカーネル法の研究、...と五十嵐さんと一緒になって議論をしました。最近は彼も独り立ちされ、私自身は多変量BS分布をノンパラメトリックへ適用しました。

6) ごく最近は、（曾さんへの指導を通じ）整数値自己回帰過程の推測にも取り組んでおりますが、当該分野で手薄な高次自己キュムラント関数などを明らかにし、YW・CLS推定量のバイアス修正に、ラグウィンドウ型バイアス補正法を提案しており、ここにもノンパラメトリック法が関与しました。

引き続き研究、教育に精進し、学会への貢献もできればと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

受賞のことば

富澤 貞男（明星大学）



このたびは名誉ある日本統計学会賞を賜り大変光栄に存じます。日本統計学会会長・理事長、学会賞の選考委員会委員、学会理事の先生方、さらにはご推薦くださいました先生方、そして関係する皆様方に厚く御礼申し上げます。私は日本統計学会に入会したのは昭和56年（1981年）であり今年で43年目になります。会員としての入会期間は長いと思いますが、しかし日本統計学会への

大きな貢献はほとんど無く、もっと本学会へ多く貢献できていれば良かったのにと反省しております。

私の統計学の研究への関わりを述べさせていたきたいと存じます。私は千葉県出身で、将来は地元の高校の数学教諭になるつもりで昭和50年(1975年)に東京理科大学理工学部数学科に入学しました。数学科の授業は大変難しく、どの科目もなかなか理解できなかったのですが、唯一2年次の「数理統計学」の科目には大変に心引かれるものがありました。3年次前期から数理統計学が専門の宮川強先生の研究室に在籍させていただきました。ゼミでは皆様ご存じの T. W. Anderson の *An Introduction to Multivariate Statistical Analysis* の本を読みました。学部卒業後に高校教諭になる予定でしたが、ゼミが進むにつれ数理統計学にますます関心を持つようになり、同大学理学専攻科数学専攻へ進学することにしました。そこでは宇喜多義昌先生の研究室へ在籍させていただき、多変量解析の研究をさらに進めました。その後、同大学大学院に理工学研究科情報科学専攻が創設され、私はそこの大学院へ進学し、国澤清典先生の研究室へ在籍させていただきました。国澤先生から、離散多変量解析の良い本が出版されているので読んで見てはとお薦めいただいたのが、Y.M. Bishop, S. E. Fienberg and P. W. Holland (1975) の *Discrete Multivariate Analysis* の本でした。当時は創設時なので、国澤研究室には大学院生は私しかおらず、この本に基づきゼミを毎週2コマ行っていたのですが、発表は毎回私一人なのでゼミはどんどん進み、特にこの本の第8章の正方分割表の解析：対称性や周辺同等性に強く関心を持ちました。当時私のゼミ発表を毎週聴いてくださいました国澤先生、清水邦夫先生(現・統計数理研究所特任教授)、神保雅一先生(現・統計数理研究所特任教授)、田中稔先生(元専修大学教授)にはいろいろとご指導賜りました。この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

Bishop らのこの本の第8章に、Caussinus (1965) の正方分割表における対称モデルの準対称モデル

と周辺同等モデルへの分解に関する定理が紹介されています。私は大変関心を持ち、106頁にわたりフランス語で書かれたCaussinusの論文を取り寄せて興味深く読みました(当時は論文が簡単には手に入らなかったです)。これをヒントにMcCullagh (1978) の条件付き対称 (CS) モデルに対して分解ができないかに関心が湧いてきて、拡張した準対称モデル、拡張した周辺同等モデル、そして比率一致に関するモデルを導入し、CSモデルがそれらのモデルへ分解可能であることを証明し、論文として日本統計学会欧文誌へ掲載していただきました。そしてその研究成果を学会で初めて発表しました。1983年の応用統計学会でしたが、広津千尋先生、富澤、竹内啓先生の順に発表し、大変に貴重な良い経験をさせていただきました。

東京理科大学の大学院博士後期課程で学位(理学博士)取得後、私は引き続き同教室の学科(東京理科大学理工学部情報科学科)に助手として採用していただき教育研究を行いました。ちなみに、国澤清典先生は昭和45年(1970年)に東京工業大学の理学部に日本で初めて情報科学科を創設され、昭和51年(1976年)に東京理科大学の理工学部に私立大学では初めての情報科学科を創設されました。創設者がともに国澤先生ですので、東京工業大学と東京理科大学の情報科学科は同じカリキュラムであると国澤先生から伺っております。日本初の情報科学科(情報科学専攻)で学位を取得し、そして引き続き同学科の教員に採用していただき、40年以上もこの学科で教育と研究を続けることができました。国澤先生には心より深く感謝申し上げたいと存じます。

さて、同学科では当時助手の寒河江雅彦先生(現・金沢大学教授)には教育と研究において大変お世話になりました。御礼申し上げます。その後、私は講師となり東京理科大学同学科において国澤研究室そして清水研究室を引き継ぐ形で富澤研究室を持つことになりました。大変に身の引き締まる思いで研究室を受け継いで参りました。富澤研究室では多くの大変優秀な素晴らしい大学院生や助手・助教に恵まれ、共同研究が途切れるこ

となく続々とできました。分割表における種々の対称性のモデルの提案、モデルの分解、対称性や連関性に関するモデルからの隔たりの程度を測る尺度の提案などの研究成果が得られました。これまで学術雑誌へ250編以上の論文が掲載されました。多くの論文が大学院生や助手・助教の先生との共著であります。なお、受賞理由が「数多くの優れた業績」と「多くの博士を輩出」となっておりますので、ここに数値を示させていただきますことをお許しください。

このたび私が日本統計学会賞を受賞できたのは、富澤研究室の大学院生や助手・助教の先生方のおかげです。この場をお借りしまして共同研究に熱心に協力してくれた大学院生へ心より感謝いたします。そして研究室を支えてくださった歴代の助手・助教の先生（着任順）である瀬尾隆先生（現・東京理科大学教授）、宮本暢子先生（現・東京理科大学教授）、田畑耕治先生（現・東京理科大学教授）、山本紘司先生（現・横浜市立大学医学部教授）、生亀清貴先生（現・日本大学経済学部准教授）、倉上弘幸先生（現・奈良医科大学医学部講師）、石井晶先生（現・東京理科大学講師）、中川智之先生（現・明星大学データサイエンス学環准教授）に、そして大学院生との共同研究指導に協力してくださった安藤宗司先生（現・東京理科大学講師）、三枝祐輔先生（現・横浜市立大学医学部講師）、篠田覚先生（現・横浜市立大学医学部助教）、石原拓磨先生（現・岐阜大学医学部助教）には心から深く感謝申し上げます。東京理科大学における富澤研究室の学部卒業生308名、修士課程修了生184名、博士後期課程修了生10名には心より感謝申し上げます。

私は昨年3月に東京理科大学を定年になり、現在は東京理科大学の嘱託教授として授業を持ち、そして明星大学に開設された日本初のデータサイエンス学環（兼 情報学部情報学科）の常任教授として研究室を持ち、これまでと同様に教育と研究を行っております。データサイエンスの教育と研究に携わる機会を与えてくださいました明星大学の落合学長、篠原副学長、そして関係する皆様

方へ心より感謝申し上げます。ちなみに明星大学のデータサイエンス学環ですが、「統計学」に関する多くの科目を設けてあり、私と中川智之准教授でそれぞれ担当しております。皆様方ご存じのようにデータサイエンスに関する教育が大変注目されております。日本統計学会は今後若い方を中心にますます発展して大きな学会になって行くと思います。私も若い方の教育と研究指導に、そして本学会発展のために、これからも微力ではありますが貢献させていただきたいと存じます。

末筆ではございますが、改めて名誉ある日本統計学会賞を授与していただきましたことに感謝申し上げます。誠にありがとうございました。



授賞式の様子：左より、川崎能典理事長、富澤貞男氏、柿沢佳秀氏、照井伸彦会長

2.2 第3回日本統計学会中村隆英賞 受賞のことは

原田 泰（名古屋商科大学ビジネススクール）



この度は荣誉ある日本統計学会中村隆英賞をいただきまして大変ありがとうございます。日本統計学会の先生方、選考の先生方、中村先生のご遺族の方々、指導していただいた先生方、共同研究をして下さった方々、研究を支えてくれた私の家族に心から感謝します。

この度の受賞に際して、中村先生のご業績について一言申し上げたいと思います。もちろん、先生のご業績は広範で、私が十分に理解しているも

のではありませんが、そのうちのごく一部の松方財政についての中村先生の評価です。

明治初期の松方財政は物価を2割近くも低下させるデフレ政策でしたが、マルクス経済学者を含む多くの経済史学者、財政学者に高く評価されています。

松方財政に対するこれまでの評価

マルクス経済学者の日本資本主義発達史は、「西南戦争を契機にそれ〔インフレーション〕が激化するにおよんで、いたずらに投機的小企業の簇生をまねき、政府が望むような資本家的企業の発達はかえって阻害されるようになった。そこで1881年以来松方正義は幣制の統一、兌換制度の確立を目ざして幣制整理をおしすすめていく……、それとともに物価は安定し、輸出は増大し、資本主義の展開は軌道にのることになった」(梶西光速, 加藤俊彦, 大島清, 大内力『日本資本主義の成立II』, 271-272ページ, 東京大学出版会, 1956年)。

と、松方財政を高く評価しています。

中村先生の評価

一方、中村先生は、「昔からの財政学の教科書には、松方という人は大変偉い人で、財政の指導者としてこんな立派な人はないと言わんばかりに書いてあります。ただ、私は今でも、それほど偉かったのかわからないと思います。『手術は成功したが、患者は死んだ』という言葉があります。外科医が思い切って大手術をし、悪いところは取り切ったけれども、あまり強引にやったので、患者は死んだという意味です。松方財政はそういうところがある」(中村隆英『明治大正史・上』385ページ, 東京大学出版会, 2015年)と評しています。

松方財政の本質は銀本位制

そもそも、インフレを抑えてデフレにするだけで、本来の投機的でない資本家的企業が生まれ、輸出が増大するものでしょうか。ここで中村先生は、当時の日本が銀本位制であったことを指摘しています。銀の価格が下がったので、日本の円も下落、それが輸出の増加、会社設立件数の増加をもたらしました。また、為替の下落で、国内物価は上昇していました(中村隆英「第7章 19世紀

末日本経済の成長と国際環境」, 梅村又次・中村隆英編『松方財政と殖産興業政策』国際連合大学・東京大学出版会, 1983年)。松方財政は、インフレを退治、デフレにした後はインフレ財政であったのです。

当時の人々の松方財政評価

松方の、デフレの後のインフレ政策は、当時の人々に歓迎されていたと思います。松方が、1881年から1898年まで、大蔵相また首相として財政政策を担うことができたのは、人々が松方財政を支持していたからだと思います。

また、松方は大変な艶福家で、明治天皇に、「お前に何人子供がおるか」と聞かれて、「いずれ帰宅、調査の上、報告申し上げます」と答えたとのエピソードがあります。調査の結果は、15男11女の26子であったといえます。芸者とか待合とかが好きだったのですから、デフレとか不況とかは肌に合わず、景気が良いことが好きな人だったと思います。

中村先生の日本経済史の特徴

中村先生の歴史学は、これまでの通説に疑問を持ち、それが本当に正しいかを、事実とデータで検証するものだと思います。私も先生に学んで、微力ながら、ある説が本当に正しいかを、事実とデータで検証して参りました。先生には及びませんが、私の努力が認められ、この栄えある賞を受賞できましたことを心から感謝しております。皆様、本当にありがとうございました。

受賞のことは

安田 聖 (一橋大学名誉教授)



この度は、中村隆英賞という名誉ある賞をいただき誠に光栄に存じます。推薦いただいた方々、選考いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

京都大学東南アジア研究センターの助手時代にアジアリンクモデル、それに引き続きペンシルバ

ニア大学のリサーチアシスト時代に世界リンクモデルのシステム開発・運用に携わり、ビッグデータの分析・保存方法について多くの知見を得ました。その後、神戸大学経済経営研究所に移り、これまでの知見を生かして多国籍企業のビッグデータを効率よく取り出すシステムを開発し一般公開を行いました。

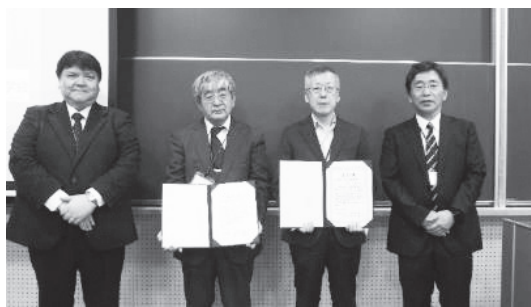
その後、一橋大学経済研究所に移り、松田芳郎教授、美添泰人教授、舟岡史雄教授らとともに、マイクロデータの分析が欧米諸国に比べて遅れていることを打開する方法を模索しました。その中で、松田芳郎教授が1996年度に、マイクロデータを多くの研究者が活用できるための道を開く目的で立ち上げた科学研究費重点領域研究「統計情報のフロンティア：マイクロデータによる社会構造分析」で事務局として尽力するとともに、海外特にカナダ、米国の公的統計の公開方法の状況と制度について調査を行いました。この重点領域研究では、毎年30前後のマイクロデータ活用の研究が3年間にわたって実施されました。それらの研究成果は高く評価されましたが、他方重点領域研究終了後にマイクロデータが多くの研究者が利用できるようにはなりませんでした。

このため、重点領域研究が終了後、マイクロデータの研究・分析が途絶える事を避けるため、米国やカナダの匿名データの提供方法を参考に松田芳郎教授と共に、当時の統計法の範囲で、個人名等を秘匿したデータとして一部の公的統計の20%サンプルを作成し、利用者に提供する方法と公開方法を模索しました。しかし、この方法では、20%サンプルの大きさが壁となり、サンプリングの方法によっては大きく結果が異なることが分かり、実用に耐えませんでした。その後、松田芳郎教授の後を引き継ぎ、20%サンプルの問題点を克服するため、「政府統計マイクロデータの試行的提供」として80%サンプルの作成の可能性を探りました。この結果が、統計法の改正につながり、現在の匿名データの提供に繋がりました。また、手続きが必要でない公的統計の利用を促進するため、公表集計表にはない比較的利用頻度が高

いと思われる集計表を、一橋大学経済研究所附属社会科学統計情報研究センターで作成し公表する制度も確立しました。

これらの成果により、これまでマイクロデータの分析・研究に従事することが出来なかった多くの研究者や教育者に、分析・研究・教育の機会を提供できる事になり、欧米諸国と同等な分析や教育が出来るようになったと思っています。

以上の成果は、特に「統計情報のフロンティア：マイクロデータによる社会構造分析」に参加して頂いた多くの研究者や政府等の統計関係者によって支えられ、またその後の統計制度改革検討委員会の委員の方々のご尽力により統計法改正に結びついたものです。この場を借りて、皆様に対して、心より深く御礼を申し上げます。



授賞式の様子：左より、川崎能典理事長、安田聖氏、原田泰氏、照井伸彦会長

2.3 第19回日本統計学会統計活動賞 受賞のことは

情報・システム研究機構 統計数理研究所
千野 雅人（大学統計教員育成センター長）



この度は、統計数理研究所「統計エキスパート人材育成プロジェクト」に対して、日本統計学会統計活動賞という名誉ある賞を授与していただき、大変光栄に存じます。学会賞に関係された

多くの方々に、厚く御礼申し上げます。

このプロジェクトは、文部科学省の支援の下、

コンソーシアムに参画する全国29の大学等と連携・協力して進めている事業です。統計数理研究所が全国の大学の若手研究者を、統計学を偏りなく体系的に教えることのできる教員に育成し、さらにその教員が各所属大学で大学院修士学生を統計エキスパートに育成するという、人材育成の好循環システムを構築することを目指しています。データサイエンス学部・学科の新設ラッシュともいえる状況の中で、深刻な問題となっている統計教員の不足に対応する取組として、高く評価していただいたものと考えております。

私がこのプロジェクトを担当するようになった際、統計数理研究所の椿広計所長から、米国では「統計家」が職業として確立され大活躍しているという話を聞きました。米国統計学会の会員誌や米国政府労働統計局の公的統計などの情報を調べてみると、本当に日本とは違う世界があることを知りました。

米国の公的統計の表章に利用される「米国標準職業分類」には、1980年代以前から、独立した小分類の職業として「15-2040 Statisticians」が存在します。ちなみに、「その他の数理科学専門職」に区分されていたデータサイエンティストが職業小分類「15-2050 Data Scientists」として独立したのは、2018年の職業分類改定の際です。職業分類が存在すれば、公的統計が作成されます。2022年の米国の「統計家」は、就業者数3万780人、年収の中央値10万5,510ドル、日本円に換算すると約1,500万円という高収入の職業です。それだけに人気の職業であり、米国のデジタル・メディア“U.S. News”の“Best Business Jobs 2022”ランキングでは、「統計家」が第3位の職業となっています。

米国も含め世界の国々の職業分類の標準となる「国際標準職業分類」においても、職業小分類に「統計家」という名称が列記されているので、このような状況は、多かれ少なかれ、世界の多くの国に見られるものと考えられます。

しかし、残念なことに、これまで日本の状況は異なっていました。国際的には標準的な職業名である「統計家」という言葉は、日本では一般には

聞いたことがありません。最近ようやく、「データサイエンティスト」という言葉を聞くようになりましたが、データ分析用ソフトウェアを使いこなすだけではなく、分析結果の解釈の基盤となる「統計学」をきちんと理解することが不可欠です。

このプロジェクトにより、一定数の統計教員や統計エキスパートを育成することになりますが、約160の大学院が毎年約5,000人の統計学修士を輩出する米国などと比べると、まだまだ道半ばだと感じます。人材育成には、長期にわたる取組が必要です。皆さま方には、今後も変わらぬご支援・ご協力をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。



授賞式の様子：左より、川崎能典理事長、千野雅人氏、照井伸彦会長

2.4 第19回日本統計学会統計教育賞 受賞のことは

都丸 希和(名古屋大学教育学部附属中・高等学校)



このたびは、「日本統計学会統計教育賞」を授与頂き、ありがとうございます。身に余る賞であり、光栄に思います。

私がデータサイエンス教育の重要性を強く意識し始めたのは、勤務校で

ある名古屋大学教育学部附属中・高等学校においてSSH 第Ⅲ期(2016～2020年度)が始まり、特設科目「SS 課題研究Ⅱ・科学倫理」(高校1年生対象・半期)の授業担当者となった頃からでした。この授業では、化学実験による適切なデータ

の取得と分析を目的としていました。普段の授業時の実験は、あらかじめ用意された手順で行うのに対し、この授業では実験計画から自分たちで考えてもらったところ、こちらが想定していたよりも多くの誤差が生じ、そもそも分析できるデータが取得できない、というジレンマが生まれました。生徒たちにとって、対照実験を作ることの難しさを痛感しました。

また、生徒が個人研究を行う特設科目「STEAM」（高校2年生対象・通年）では、興味深い研究テーマであっても、限られた授業時間内の中では分析に適する結果を出すことができない生徒が多く見受けられました。教科の授業では、データの特徴に対する理解まで深めることができず、データサイエンス教育の重要性を感じながらも、現状のカリキュラム内では限界があると感じていました。

そして2021年度より、特設科目「データサイエンス」（高校1年生対象・通年）と「STEAM」（高校2－3年生対象・通年）が設置されました。「データサイエンス」では、前期に取り扱うデータに対して適切な統計分析方法を選択し、結果を正しく解釈することを目的としています。教育用標準データセットであるSSDSE（統計センター）を利用して頂き、実際に分析をする中で、特にデータの特徴を理解することの大切さを伝えています。後期は、問題や仮説の設定をした後に、実験計画を立て、適切なデータを収集する方法を理解することを目的としています。

ここに至るまでには、様々な方々に関わっていただきました。三小田博昭副校長をはじめとし、教科横断型の授業をともに作ってくださっている名古屋大学教育学部附属中・高等学校の先生方に心よりお礼を申し上げます。また、教育実践は生徒無くしては行うことができません。聞き慣れない言葉も多くあるデータサイエンスの授業を理解しようとし、研究に活かそうとする生徒たちの姿に、私自身何度も支えられてきました。

さらに、大学在籍時からご教授して頂いている名古屋大学名誉教授・神保雅一先生には、授業でのご講演や生徒の発表への助言を行って頂きまし

た。幾度も授業見学やご助言を頂いている東京大学・藤村宣之先生、データサイエンスの授業構築時から関わって頂いている名古屋大学・石井秀宗先生、統計的手法の多様性についてご指導頂いている関西大学・脇田貴文先生、高大接続においてご協力いただいている皆様に深く感謝を申し上げます。林宏樹先生、林兵馬先生をはじめ統計教育普及のために交流を行い、意見を共有させて頂いた関連校の先生方へ心よりお礼を申し上げます。そして最後に、私の研究を見守ってくれている家族に感謝しています。

改めまして、このような機会をご準備して頂いた先生方や関係者の皆様に心より感謝申し上げます。引き続き、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。生徒たちがデータを楽しく活用できる取り組みをこれからも進めていきたいと思っています。この度は、本当にありがとうございます。

受賞のことば

香川県立観音寺第一高等学校 FESTAT

小山 圭二（校長）



この度は、本校の事業FESTAT（全国統計探究発表会）が統計教育賞をいただき、授賞式にお招きいただくという大変光栄な機会をいただいたことに、深く感謝申し上げます。この受賞は、実に

多くの方々のご指導やご支援のもと、数年にわたって続けてきた取り組みが、広く認められた証として、心より嬉しく思っております。

現代の社会では様々な場面において、データを扱い、情報を分析し、問題を解決していくことが求められています。従来の座学の勉強だけでは、必要な力を十分に身につけることはできません。統計を活用した探究活動を、広げていく必要性があります。

統計を活用した探究は、生徒の興味から始め

ることができ、文系・理系を問わず取り組みやすく、生徒が数学の有用性を実感できる活動です。しかし一方で、多くの教員は、数学の教員を含めて、体系的に統計を学んでいるわけではありません。生徒の育成、さらに指導者も養成するためには、高校生が統計を活用した研究を発表し、交流し、専門家のご指導ご助言を受ける機会や、教員が専門家の指導助言や他校の実践から学んだり、繋がったりという機会が、どうしても必要であると考えました。交流の機会が比較的多いSSH指定校においても、理科の課題研究に比べますと、そういった機会が非常に少ないという現状がありました。

必要なものがないならば、私どもで作っていくしかない、と、当時数学の課題研究を指導していた石井裕基先生が中心となって、案を練っていきました。高度な分析や研究成果を競うコンペティションではなく、研究初期の、研究計画でも、仮説の立て方が分からないという段階、どういった統計的手法が適切かわからない、分析したけれども、その結果や考察が妥当かどうか、助言が欲しい、といった、様々な研究段階の生徒や指導する教員が一堂に集い、まさに「学びと繋がり」の場として、FESTATの構想が出来上がってきました。祭典・フェスタと、統計・スタティスティクスを合わせて、この取組みの名称を、FESTATと名付けました。

FESTATは、SSHの科学技術人材育成重点事業として、令和元年度に始まりました。前年の平成30年に文部科学省で申請に対するヒアリングがありました。そこで、「なぜ統計が、観音寺第一高校なのか、なぜ香川県でデータサイエンスなのか」と、少し厳しい言葉もありました。それに対して、当時の多田幸平校長は、「必要な取組みであるにも関わらず、誰もやっていないのだから、自分たちで創っていくのです」と答えました。

令和元年度は対面で、翌年からはオンラインで、実施してきました。講演や応援メッセージ、発表交流、教員交流、大学生の参加など、様々なことに取り組んできました。オンラインにより、

場所や時間の制約を超えて、毎年多くの学校から参加いただいております。

最後になりますが、この名誉ある賞を授与してくださった選考委員の皆様、本校運営指導委員の渡辺美智子先生、山田剛史先生をはじめ、アドバイザーとしてご参加いただいた統計関係の皆様、JDSSP 高等学校データサイエンス教育研究会の皆様、連携協定を締結していただいた滋賀大学の皆様、そして、全国各校の生徒の皆様、共に学び合う全国の高校の先生方に、心より感謝申し上げます。皆様のご支援やご賛同がなければFESTATは実現できなかったものです。今後も、私どもは、統計教育の普及と充実に貢献し、社会に有益な人材を育てるために尽力してまいります。どうもありがとうございました。



授賞式の様子：左より、川崎能典理事長、都丸希和氏、小山圭二氏、照井伸彦会長

2.5 第17回日本統計学会研究業績賞 受賞のことば

奥井 亮（東京大学）



この度、光栄にも日本統計学会研究業績賞を受賞することとなり、心から感謝申し上げます。この賞を受けることができたのは、推薦していただいた方々、選考委員の皆様、これまでの指導教員

の方々、共同研究者の皆様、様々な大学での同僚、そして学生の皆様のおかげです。これまで数多くの方々を支えられてきた研究の成果が、こう

して評価されることは、感慨深いものがあります。心から感謝いたします。

研究業績賞の受賞対象となった研究は、動学パネルデータ分析において、異質性や構造変化をどのように取り扱うかというテーマに基づいたものです。パネルデータは、多くの観測個体の複数の時点での観測値を含むもので、経済分析において非常に有用で広く使われています。動学パネルデータ分析は、私が学生時代から研究をすすめてきた分野で、ジョブマーケット論文は、動学パネルデータモデルの操作変数推定に関わるものでした。それから現在にいたるまで、動学パネルデータ分析の色々な側面について研究を進めています。異質性や構造変化の問題以外にも、東京大学の新谷元嗣先生とカンザス州立大学のイ・ユンジン先生との共同研究として進めているモデルの特定化に頑健な手法の開発も評価いただけたようですね、うれしく思います。

異質性は、近年の経済分析では重要視されています。例えば、マクロ経済分析などで、経済主体の異質性に正面から取り組んだ研究が重要となってきました。一方で、動学パネルデータ分析で異質性を捉えようとすると、込みいったモデルを使って複雑な計算をこなす必要がありました。そこで、当時京都大学の学生であった柳貴英先生（現在は京都大学の教員）とともに、パネルデータを使って動学構造の異質性の記述統計のようなものができるか、という研究を始めました。なかなか難しい研究で時間はかかりましたが、数年前に論文を複数公刊でき、こうして研究業績賞の対象として評価いただけたことに感謝しております。

また、異質性を分析する手法としてはクラスタ解析がありますが、これが経済学での研究に使われるためには、様々な解決すべき問題があります。国別のデータは比較的取りやすく多く使われていますが、長期間に渡るために、構造変化を考慮する必要があります。そこで、グループ構造のあるパネルデータで構造変化を検出する手法の研究を行いました。これらはロッテルダムのエラスムス大学の王文敦先生との共同研究です。またそ

の後、構造変化の大家であるロビン・ラムズダイン先生も研究のチームに入っていただきました。おかげさまで、これらの研究成果は、比較的スムーズに成果を出すことができました。

統計学の魅力は色々あるとは思いますが、広い範囲の研究者と会話ができることは、その一つです。私がクラスタ解析に興味をもったのは、2015年に労働経済学コンファレンスでチュートリアルを行った時です。その時のテーマはパネルデータを用いた異質性の分析でした。その中で紹介した手法の中で聴衆に最も興味を持っていただいたのが、クラスタ解析を用いた方法でした。学会大会や研究会は、研究者間の交流という意味でも非常に重要です。そうした機会を提供していただいている日本統計学会に感謝するとともに、さらなる発展をお祈りしております。

最後になりますが、この荣誉ある賞に恥じぬよう研鑽を積み重ねていきたいと思ひます。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い致します。

受賞のことば

青木 敏（神戸大学）

この度は、日本統計学会研究業績賞を賜りまして、大変光栄に存じます。歴代の研究業績賞受賞者のリストを拝見し、私の名がここに加わることに身が引き締まる思いです。推薦していただい



た先生には、感謝の気持ちと同時に、私の研究に注目していただいたことを励みに思ひ、期待を裏切らぬようこれからも努力する所存です。選考委員の先生方にも、お礼申し上げます。また、大学院でご指導いただきました宮川雅巳先生、廣津千尋先生、竹村彰通先生をはじめ、これまで研究会や共同研究でご指導いただきました多くの先生に感謝いたします。

受賞理由となった一連の研究は、私の研究テーマであるグレブナー基底の理論を、実験計画法の

問題に使ったものです。グレブナー基底の理論の統計学への応用は、学位論文以降、竹村先生との共同研究で取り組んだテーマです。実験計画法には、修士課程で指導教員の宮川先生より教わり興味を持ちました。また今回の研究では、定式化に、大学院で廣津先生よりご指導いただいた分割表解析の考え方を使っています。3人の恩師の先生に関連深いキーワードをもつ研究ができたことから自然な結果なのですが、感慨深い気持ちもあります。

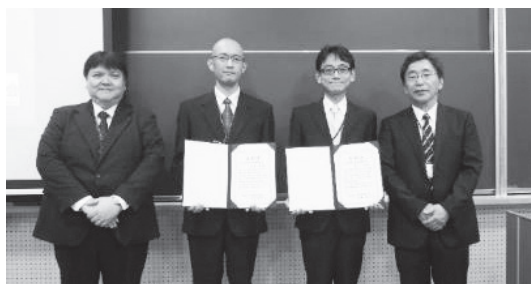
今回の研究では、複数の多水準因子に関する実験において、与えられた性質をもつ一部実施計画をどのように構成するか、という問題に取り組みました。このような問題に対して実験計画法の教科書では、2水準、3水準因子に対する直交表や線点図の利用といった、応用面を重視した説明が多いという印象がありますが、これを一般的な枠組みで考えて理論を構築したいと考えました。グレブナー基底の基本的な理論に、繰り返しのない計画上の応答空間は、ゼロ次元多様体上の応答空間として一般的に扱うことができ、その構造はグレブナー基底の計算により分かるというものがあります。今回の研究はその理論を応用したもので、計画上の指示関数に注目し、計画の性質を、指示関数の係数が満たす代数方程式系として表しました。私が導いた構造は、計算代数の分野で2水準計画についてよく知られていた構造を一般化したものです。分かっただけでは自明に思える一般化なのですが、2水準計画に限定すれば、計算代数の理論は実験計画法における古典的な結果と繋がりがあがる、きれいな結果であるため、一般化が見逃されていたのかもしれませんが（その点、私には幸運でした）。

グレブナー基底の研究には、理論と実際の代数計算という両面があります。今回の研究では、一部実施計画を構成するという問題が、ゼロ次元イデアルの零点列挙と同値類への分類の問題として定式化できることを一般の設定で示したのですが、実際の代数計算では計算量的に行き詰まる、

ということは日常的に起こりました。統計学で興味を持たれるサイズの問題に対する代数計算には、共同研究者の野呂正行先生にアドバイスをいただきながら、数値代数幾何とよばれる分野を勉強しながら取り組みました。野呂先生は、代数計算アルゴリズムの開発の専門家であり、現所属で私の前任者にあたります。統計学・代数学のそれぞれの分野で、多くの先生にご指導いただいている私は、本当に恵まれていると思います。

計算代数統計が注目されたのは90年代初め頃で、既に30年が経過しました。その間、扱うデータのサイズが大きくなり、統計手法もそれに伴って発展する中、私は変わらず数十変数の代数計算に四苦八苦する研究を続けています。若干、取り残された感もありますが、代数の理論が応用統計学の問題にかっちりハマる発見があると嬉しく、もう少しこの分野で頑張ってみようと思います。

最後に、統計学と日本統計学会の一層のご発展をお祈りしております。



授賞式の様子：左より、川崎能典理事長、青木敏氏、奥井亮氏、照井伸彦会長

2.6 第37回日本統計学会小川研究奨励賞 受賞のことば

明石 郁哉（東京大学）

この度は日本統計学会小川研究奨励賞をいただき、大変光栄に思います。推薦していただいた先生方、選考委員の方々に御礼申し上げます。またこれまでご指導・共同研究をしていただいた先



生方、研究室の先輩、同期、後輩の方々にも、この場を借りて感謝申し上げます。特に博士課程の指導教官である谷口正信先生には、学部でのゼミからお世話になり、学位取得後も共同研究をしていただき、学問的な面だけではなく研究者としての振る舞いや心がけもご教授いただきました。心より感謝いたします。

今回受賞対象となった論文は、私の博士課程在籍時から研究している非正則時系列モデルに関するものです。経済データをはじめとする現実の時系列データの多くは時間的な従属性を持ち、また有限分散を持つ確率分布からの実現値であると仮定するには分布の裾が厚すぎることがよく知られています。また Hurst の1951年の結果に始まる時系列モデルの長期記憶性についても、データ例や回帰モデル・連続値過程によるモデリング手法も含めて、膨大な理論の蓄積があります。一方で、非正則モデルにおける漸近理論は煩雑になり、統計的推測が困難になることも知られています。そのため、現実のデータに適用するためには理論的な性質を求めるだけでは不十分で、モデルごとの性質に着目した工夫が必要になります。修士課程1年生まで二次定常過程に対する推測理論を学んできた私にとっては、これらの非正則モデルの話題はある意味で除外していた分野でした。しかし、現実データの性質としては非正則時系列によるモデリングのほうが自然であること、また実用性のある推測手法はまだ系統的に整備されていなかったことから、この分野に興味を持ち今日まで携わってきました。博士課程の間は理論的な性質に興味を持ち研究を進めていましたが、学位取得後にイリノイ大学のXiaofeng Shao教授のもとに滞在した際に、自己加重型least absolute deviation (LAD) 回帰推定量の論文をご紹介いただきました。この手法は、基本的な時系列モデルである自己回帰モデルの構造に着目し、推定量のロス関数に自己加重と呼ばれる修正を加えるもので、単なるLAD回帰では不可能であった無限分散性の制御が可能となります。結果として、モデルの有限分散の有無に関わらず、推定量・検定統計量に望ましい性質

を持たせることができ、実際の問題に適用可能な推測理論が構成できます。この手法を参考に、2017年度の単著論文では経験尤度法と組み合わせた基本的な加重型統計量を構成し、先行研究を改良した手法を提案しました。その後、無限分散モデルの変化点検定問題や系列間の因果性検定問題などへ応用し、受賞論文の Akashi, Dette and Liu (2018), Akashi, Taniguchi and Monti (2020) として出版されました。また2016年には Boston 大学の Murad Taqqu 教授を短期訪問し、長期記憶過程の頑健推測理論の共同研究を行いました。この研究では、自己基準化という手法を用いて収束レートの問題を巧妙に回避した先行研究を基に、長期記憶性を持つ時系列回帰モデルの頑健な推測理論を構築しました。この結果はその後、Akashi, Bai and Taqqu (2018) として出版されました。

これまでの研究は主にスカラー値確率過程に関するものですが、多様化するデータに対応するためにはベクトル値・行列値過程や、さらにはテンソル値過程への頑健推測理論の拡張が望まれます。そのためこれまで培った経験を基に、頑健推測理論のさらなる拡張や新たな非正則モデルの構成などの研究を推進したいと考えています。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

受賞のことは

松田 孟留 (東京大学)



この度は小川研究奨励賞をいただき大変光栄に存じます。関係者の先生方に御礼申し上げます。また、学生時代の指導教員である駒本文保先生をはじめ、研究指導や共同研究などでお世話になっ

た皆さまにも感謝申し上げます。

受賞対象となった5つの論文は多くの方々との共同研究です。こうした共同研究の機会に恵まれて本当に幸運だったと思います。

Rutgers 大学の William Strawderman 先生との共同研究では、「行列優調和性」という概念を導入することで、Stein の縮小推定理論の行列への一般化に取り組みました。Strawderman 先生は統計的決定理論、特に縮小推定について50年以上研究している先生で、日本人の共同研究者も多いです。私は博士1年の学生のときから毎年 Rutgers 大学を訪問して共同研究を行ってきました。初訪問のとき、ニューアーク空港で Takeru Matsuda と書いた紙を掲げて待っていてくれた先生の姿は忘れられません。結局そのときに取り組んだ問題では成果が出なかったのですが、先生は come again と優しく声をかけてくれました。受賞対象となった研究は2020年3月の滞在中に着想を得たものです。ちょうどコロナウィルスの流行が始まった頃で、少し予定がずれていたら訪問できなかったと思います。いつも通り先生の部屋で計算していたのですが、いつも通りうまくいきません。気晴らしに机の上の本や論文の山を漁っていたところ、たまたま行列損失のもとでの縮小推定に関する論文 (Abu-Shanab, Kent and Strawderman 2012) を見つけました。この論文を読んでみて、以前から研究していた特異値縮小推定量との関連が気になり、今回の結果に至りました。

理化学研究所の甘利俊一先生との共同研究では、Wasserstein 距離に関する射影として定義される推定量の性質を調べました。Rutgers 大学から帰ってきてまもなく、甘利先生から我々にメモが送られてきました。コロナで研究集会等が中止になって時間ができたので、以前から取り組んでいた計算をまとめてみたとのことでした。試しに数値実験を行ってみたところ、予想に反する結果が得られました。これをきっかけに研究がスタートし、最終的にはまとまった結果を得ることができました。緊急事態宣言が発令され、引きこもって計算していたのを思い出します。

Helsinki 大学の Aapo Hyvarinen 先生との共同研究では、非正規化モデル（計算困難な規格化定数をもつ統計モデル）に対する情報量規準を開発しました。非正規化モデルに適用可能な統計手法を

整備することで、規格化定数の計算可能性を気にせずに統計モデルを構築できるため、データの柔軟なモデリングが可能になると考えています。

今回の受賞を励みに、今後も研究活動に精進してまいります。また、Strawderman 先生も甘利先生も80歳を超えていますが今でも元気に研究を続けておられます（この文章を書いている現在、Strawderman 先生が本郷に滞在中です）。お二人のように健康に長生きできればと思います。



授賞式の様子：左より、川崎能典理事長，明石郁哉氏，松田孟留氏，照井伸彦会長

2.7 第3回 ISI 東京大会記念奨励賞

この賞について

川崎 茂（滋賀大学）

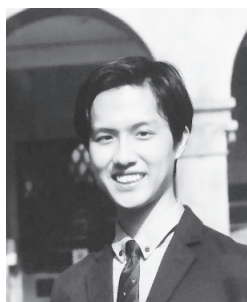
日本統計学会では、若手研究者の国際的な活動を支援することを目的として、ISI WSC (ISI World Statistics Congress) において研究発表を行う人を対象として、2019年から「ISI 東京大会記念奨励賞 (ISI Tokyo Memorial Award)」による表彰を行っています。この賞は、1987年に東京で開催された ISI WSC 1987を記念して創設されたものです。ISI WSCは2年毎に開催されており、本年は7月16日から20日までカナダ・オタワで開催されました。5名の受賞者は、それぞれこの大会で研究成果を発表されました。受賞者の皆様の一層のご発展とご活躍をお祈りします。

この賞の募集は今後も2年ごとに行われる予定です。次回の ISI WSC は2025年7月13日～17日にオランダ・ハーグで開催されます。この賞に関する今後のスケジュールは現在未確定ですが、通例に従えば、2024年夏に募集開始となります。応募

の要件は、2025年の ISI WSC において研究発表を行う若手研究者となります。詳細な募集要項は学会ホームページ等において公開されます。関心のある会員の方は奮ってご応募ください。

受賞のことは

助田 一晟（東京大学）



この度は ISI 東京大会 記念奨励賞を賜り光栄に存じます。今までご指導いただいた先生方と推薦いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

私は現在東京大学の修士2年生として、東京大学清智也教授のもとでコピュラ統計学についての研究を進めております。特に最小情報コピュラと呼ばれる、2変数の従属性に特定の制約条件を与えた下で最も情報量が小さい同時分布について主に理論方面から考察を行っています。今回発表させていただいた内容はその制約条件として Kendall の順位相関係数を固定するものを扱っています。7月にカナダのオタワで開催された ISIWSC という国際学会では離散近似版の結果を発表し、京都で開催された統計関連連合大会ではこのコピュラが実は既存研究で典型的に使われてきた有名なコピュラに一致するという内容を報告しました。

ここでは ISIWSC を簡単に振り返りたいと思います。私にとっては統計分野では初となる国際会議での発表機会でした。1人で参加するにあたって心細さもありましたが、結果としてブラジルやオランダなど様々な国の研究者や統計家、そして本賞を共に受賞している先輩の方々と交流でき楽しい8日間を過ごせました。会議ではコピュラの発表が突然キャンセルになるなど残念なこともありましたが、あまり計画を立てずに見回っていたことが功を奏し、Young Tableau や FDA における従属性など、自身の研究テーマと親和性の高い概念等を偶然知ることもできました。余談ですが、私は人見知りなので、緊張しながらも発表後に質

間に行くという挑戦ができたことも良かったです。総じて充実した会期を過ごすことができ、この場を借りて貴重な機会をいただきましたこと、関係者一同に感謝申し上げます。

この研究をはじめたきっかけは、清教授が日本統計学会誌で取りまとめていた内容を拝読したことからでした。こちらの論文の中では今後の展望として、既存の結果を Kendall の順位相関へ拡張することが興味深い話題の1つとされています。もともと仮説や目的などがあったわけではなく興味本位で考察してみたという程度のきっかけではあったのですが、結果としてコピュラを解釈する上で有益で、かつ自分自身としては面白いと思える主張に繋がりがつつあることを実感しています。このように、ひょんなことから2つの事柄の関係性が明らかになったりする部分も、研究活動の魅力なのではないかと感じるようになりました。まだまだ未熟なので、引き続き結果の拡張に務めていきます。

受賞のことは

若山 智哉（東京大学）



この度は ISI 東京大会 記念奨励賞を賜り、誠に光栄に存じます。選考に携わってくださった先生方、指導教官である慶應義塾大学の菅澤翔之助先生をはじめ、共同研究に携わる皆様、そして私の

研究活動を日頃からご支援いただいております多くの方々に、心より感謝の意を申し上げます。

The 64th ISI World Statistics Congress 2023において発表させていただいた研究“Spatio Temporal Factor Model for Large Scale Data”では、現代社会で急速に普及している携帯端末から取得される膨大な人口データの解析に焦点を当てました。このデータは、交通渋滞の緩和や災害時の避難誘導など、多岐にわたる場面での活用が期待されています。本研究ではデータの持つ時空間の相関と大規

模性という特徴を考慮したベイズ因子モデルの提案を行い、人口予測を現実的な時間で行うことができました。さらに、地区間の関係性や曜日特性を可視化することにより解釈性を向上させ、データ志向の意思決定を支援することができます。

ISIでの研究発表は、私にとって非常に有益な経験となりました。世界中から集まった専門家たちとの議論を通じて、新たな視点や研究の方向性を得ることができました。また、他の研究者の発表を聞くことで、自分の研究の位置付けや今後の課題についての深い理解を得ることができました。

この受賞を励みに、私はさらに研究を深めていく所存です。特に、大規模データの解析手法の発展や応用分野への展開を目指して、日々の研究活動に取り組んでまいります。今後も、統計学の発展と社会への貢献を目指して、精進して参りますので、引き続きのご支援とご指導を賜りますようお願い申し上げます。

受賞のことは

武石 将大（東京大学）



この度は第3回 ISI 東京大会記念奨励賞に選出いただき、誠にありがとうございます。ISI World Statistics Congress 2023では「High-Dimensional Statistics」なるセッションで「A Shrinkage Likelihood

Ratio Test for High-dimensional Subgroup Analysis with a Logistic-Normal Mixture Model」という研究を発表しました。自分の研究発表以外にも、統計学に関わる多くの分野の研究者と交流でき貴重な経験となりました。

さて今回発表した研究は私がここ1、2年取り組んできたものです。臨床治験等で薬の効果が他とは異なる集団（サブグループ）が存在するかどうかを仮説検定する手法を開発しました。サブグループが存在しないという帰無仮説下ではサブグ

ループを特徴付けるパラメータが識別できなくなります。ですので、本研究で扱う仮説検定は特異なものとなっているのですが、識別できないパラメータを帰無仮説下で一点に縮退させることでその特異性を解消する検定統計量を提案し、サブグループを特徴付ける変数が高次元の場合でも上手く働くことを示しました。本研究を進めるにあたって、指導教員である東京大学の下津克己先生からは多くの助言をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

今回の受賞を励みにより一層精進して参ります。今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

受賞のことは

岡部 格明（同志社大学）



この度は、第3回 ISI 東京大会記念奨励賞という大変栄誉ある賞に選出いただきまして誠に光栄に存じます。

今回、カナダのオタワで行われた、The 64th International Statistical

Institute World Statistics Congress 2023では、「Statistical inference」というセッションで「Dimensionality reduction using the ordered label for trajectory inference」というタイトルで発表いたしました。

今回発表した研究は、遺伝子発現データなどの高次元データの次元縮約を行うための手法を対象としています。データとして、外部に順序ラベル情報が得られたときに、その情報を制約として取り入れることにより、より解釈性の高い次元縮約を行う手法を提案しました。この中で、順序ラベルの情報を取り入れるために順序距離の互換性という性質を用いることによりこの次元縮約を行っています。実データへの適用例として、遺伝子発現に関するデータを用いました。このデータには、外部の順序ラベル情報として疾患の順序が含まれており、提案手法を適用することで、従来の

方法に比べて、疾患の順序を反映したような次元縮約ができました。

ISIWSC には初めての参加でしたが、会議全体の規模が大きい反面、CPS では、座長がいないなどセッション内の雰囲気が和やかで、発表者と聴講者の距離も近く、質問もしやすい環境でした。そのほかに行われていた企画セッションにおいても公的統計やゲノミクスなど大変幅広いセッションが行われており興味深い発表ばかりでとても刺激的な場所でした。

最後に、平素より大変お世話になっております、指導教員の宿久洋先生、また、普段の研究活動においてディスカッションをしていただくなど大変お世話になっている先生方、選考に携わっていただいた先生方にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

今回の受賞を励みに、より一層の精進をして、良い研究ができるように努力をしていく所存です。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願いいたします。

受賞のことは

柚木 慎太郎（同志社大学）



この度は、第3回 ISI 東京大会記念奨励賞という名誉ある賞をいただきまして、大変光栄に存じます。指導していただいた先生、選考委員の方々、受賞実施に尽力いただいた方々、これまで研究指

導や共同研究でお世話になった全ての研究者の方々に感謝申し上げます。特に、博士課程の指導教員である同志社大学の宿久洋教授には、絶えず励ましの言葉や研究上のアドバイスをいただき、深く感謝しております。また学部3年次生より様々なご助言を頂きました谷岡健資先生に、心より御礼申し上げます。

今回受賞対象となった研究である“Estimation of Treatment Effects for Multiple Outcomes by Using

Pliable Lasso” は、私が学部生時代から追いかけていたテーマである多変量回帰を用いた処置効果の推定に関するものです。この研究では、臨床試験にて得られるデータを用いた分析手法の提案を行いました。臨床試験では、主要評価項目・副次評価項目が存在し、またそれらは高い相関を持つ場合があります。そのような例として、主要評価項目としてコロナワクチンによる発症率の減少、副次評価項目としてコロナワクチンの副作用の発生率等が挙げられます。単変量回帰モデルを用いた処置効果の推定では、これらの相関構造を捉えることが出来ず、このことから多変量回帰モデルを用いた処置効果の推定という着想を得ました。また本研究は、推定された処置効果の視覚化に焦点を当てており、得られた推定値をパス図で表現することによってアウトカムに影響を与える共変量を解釈することができます。この視覚化のために、変数選択法として Pliable Lasso (Tibshirani and Friedman, 2020) を用いました。この変数選択法は、主効果が存在する変数に限って相互作用を考えるような階層制約を持つ手法となっております。これは処置効果の推定と相性がよく、主効果が存在する変数に限って処置との相互作用を考えることができます。この手法により、共変量からアウトカムに繋がるパスを変数選択によって削除することができるため、解釈の容易性を担保することができました。私が提案した手法の適用例として、R の package “speff2trial” における実臨床試験のデータ ACTG175 を用いました。これはジドブジンとジダノシンの併用や、ジドブジンの単独



授賞式の様子：左より、川崎能典理事長、武石将大氏、助田一晟氏、岡部格明氏、照井伸彦会長

服用などの4つの治療群から成るデータであり、人種や性別等の様々な共変量からCD4 T細胞とCD8 T細胞の処置効果を推定しました。その結果、推定されたパスの一部が実臨床で得られている結果と一致していることが確認できました。

この手法については、まだ考察できていないこ

とが沢山あります。例えば臨床試験では多値や二値のアウトカムが得られることから、より一般的なモデルを検討するべきであると考えます。これからの研究にあたっての困難は数多くありますが、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

3. 第6回 細谷賞の公募

松田 安昌（東北大学）

東北大学大学院経済学研究科では、細谷雄三名誉教授の統計学界における教育・研究への貢献を記念して、広く人文・社会科学分野における若手研究者のデータ科学研究を奨励するため、細谷賞を創設しました。このたび第6回細谷賞の公募を開始いたします。本賞は、東北大学須永特定基金より寄付を受け日本統計学会の後援により実施するもので、受賞者には研究奨励金（10万円）を授与します。人文・社会科学におけるデータ科学の理論および応用研究に努める多くの若手研究者の応募を期待しています。

1. 応募資格

- (1) 過去3年程度以内に、国内外の学術誌に掲載された人文・社会科学分野におけるデータ科学（統計分析・計量経済分析を含む）に関連する論文（単・共著ともに可）の著者であること。

- (2) 論文出版時点において40歳未満の者。

2. 応募期限 2024年3月31日必着

3. 応募書類

- (1) 申込用紙

(<http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~DSSR/hosoyapriz.html> よりダウンロード)

- (2) 審査対象とする論文1編

4. 送付／問合せ先

応募書類をPDFファイルにまとめてEmailにて下記宛に送付のこと。

dssr-sec@grp.tohoku.ac.jp

〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1

東北大学大学院経済学研究科サービス・データ科学研究センター

<http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~DSSR/>

5. 発表の通知 2024年6月（予定）

11月（予定）に受賞者を東北大学に招待し、表彰式およびHosoya Prize Lectureを行います。

4. 2022年7～12月統計検定 CBT 方式試験の成績優秀者

照井 伸彦（日本統計学会会長）

川崎 能典（日本統計学会理事長）

準1級

最優秀成績賞（S）：相内正治、赤田雄治、池側佑哉、石川紗耶香、和泉利隆、磯崎洋平、伊藤真道、妹脊政毅、岩谷幹太、上村寛太、大木基嗣、大野宇宙、大橋侑馬、栢宏輝、川崎雄馬、河村知

明、菊池孝宏、木村大樹、倉橋輝、近藤敬也、齋藤克知、鈴木健吾、高橋優大、高濱修輔、竹内巧起、辻本健太郎、坪井優樹、永田雅俊、中西一貴、根本慎司、野崎航平、野田考平、馬場由羽貴、濱口皓介、平松信義、堀尾朋矢、山中逸輝

優秀成績賞（A）：青柳亨，新井和菜，荒深遊，有田圭吾，植田忠行，奥村健人，甲斐雅隆，加賀凜大，勝原康雄，加藤直人，兼古寛之，川口雄也，九保佑匡，古賀北斗，佐野広大，鮫島雅彦，神亮太，信楽隼風，須田颯人，瀧海人，田屋侑希，中島弘貴，根本侑磨，野村一敏，服部拓海，平泉真生，平田慧介，藤中峻，星陽介，三村雄大，村瀬亮多，森雄一郎，柳内武志，山下英孝，山本吉輝，結城奎詩郎，吉田昌剛，吉増崇志，吉村元聖，吉森雄大，Rakoto Virgile，若井祐樹

2級

最優秀成績賞（S）：足達勇介，伊吹康平，大庭崇稔，柿塚亮，栢宏輝，杉本涼，谷本凌，徳村謙祐，野村宜成，坂東佑一，藤村一彦，古川暁之，松下陸生，山田克拡

優秀成績賞（A）：秋田真利亜，足立拓海，阿部匠之介，池田靖弘，伊澤茉莉花，伊藤駿佑，今莊保，入谷長門，岩見耕空，上野友裕，植村俊彦，内田和男，大石圭悟，小笠原章弘，小川忠之，小田島洋斗，皆倉諒，片上裕太，菊池孝宏，菊地玲，衣川琢磨，忽那幸希，黒滝歩澄，小出恭一，小暮諒，小柳健，近藤紗公乃，近藤知昭，佐久間諒，佐多光世，佐藤全，佐藤仁，品川彩人，島田和也，鈴木貴之，須田涼介，住奥響，添田彰人，高橋周司，谷口善嗣，田村貴志，藤間海斗，長澤達也，長堀達信，七澤順大，西井俊貴，西岡亮，西川恭平，西村隆裕，野田亮輔，橋詰翔龍，幡本翔，藤原正貴，古田優太郎，穂坂大将，前橋秀俊，松植洋憲，三浦光樹，源圭生，宮内佑也，村木辰吉，森万葉，森川直樹，森田堅斗，山村佳史，山本楓己，横澤輝

3級

最優秀成績賞（S）：内山海渡，大神茂之，沖村采城，大久保里矩，大地勝利，大戸隆広，加賀谷亮輔，加藤章紘，加藤辰哉，川端賢司，久保田光矢，黒澤浩樹，小島琢矢，小針靖子，佐伯歌那湖，笹川博史，佐藤智哉，柴田宗将，下條尚輝，高見陸，玉置利行，土屋典之，堂ヶ原健，中江美

佳，永田充，長谷川舜一，比嘉友紀，増田嵩大，矢田聖久，山田恭司，湯田愛弥，湯瀬直也，吉田京平

優秀成績賞（A）：朝山雅基，阿多石浩輝，安西あゆみ，石井皓太，石川和史，石田哲大，伊藤裕太，伊藤勝仁，伊東邦昭，伊東史人，伊藤真衣，伊藤瞭，井上智晴，井原知子，岩田繁，上野峻穂，宇佐美愛子，大石孝一郎，小川泰知，扇喜裕子，大西慧也，大山俊祐，柿本亜由美，影山佳孝，笠井雄介，加地一真，川合孝英，河野圭浩，川村優介，木田幸寿，木戸祐介，清岡研治，楠井冬樹，桑田隼，倉持達也，黒瀧璃奈，後藤浩文，琴屋健太郎，齊藤稔，坂口智之，佐々木美紀，佐藤美月，塩川裕貴，重田幹太，澁谷維，下西ノ園隆史，進藤和也，鈴木悠也，鈴木丈浩，仙波達哉，曾根百健，高田寛人，高橋洋平，竹内基起，田中直樹，辻皓平，辻浦沙季，中村昂太，中村恒彦，難波行宏，南郷脩介，西岡周造，西本政弘，橋爪佑弥，長谷川倫男，長谷部暖，坂東ちなつ，深澤陶馬，深谷建太，福島仁美，福武修造，藤塚俊寛，藤森聡，二神裕介，星亮太朗，松井誓，道野仁理，三木雄太，宮越陽大，村田峰子，森正，森岡洋一郎，森川賢祐，諸澄正俊，安川武男，谷津田博伎，柳川由紀子，山田強太，山田雅統，山本明奈，山本恭平，山本茉奈，Yoon Seongho，吉田昌憲，若山智輝，鷺尾健一，和田翔瑠

4級

最優秀成績賞（S）：今井晃基，大地勝利，大戸隆広，川口穂乃香，北野輝，黒木伸憲，小池脩平，志村竜二，末光優斗，高嶋修，高橋勝哉，千葉雄介，中村一成，西尾嘉津政，秦淑晃，坂東佑一，船木翔，松川巧，松本健太郎，丸山賢一，宮川豪紀，森口桂

優秀成績賞（A）：徐越美，磯貝豊，井上雅也，内海誠，馬本和英，遠藤照也，岡田健太郎，岡本さなえ，大塚裕子，大橋正寛，金井和揮，軽込和隆，北奥理江，木原詩織，小柿孝浩，小林達矢，小柳勝彦，坂本由紀，座間泰成，柴田亘，杉山裕紀，助野巧，張契洙，曾霞，高尾瑞希，高瀬光

志，高野大輔，高橋泰三，種岡望未，田村拓也，戸村栄一，中尾周樹，中澤迪伽，長濱海太，西沢元之，狭間亮平，橋本康裕，長谷拓耶，秦志於里，秦秀治，畠中陸，服部広隆，福岡正義，福重佑香，古家朝子，前川昌幸，松村斗和，水田瑛深，水野雅之，葉袋真綿，三原光晴，山田享介，山本雄丈，吉田京平，吉野数理，渡邊祥己

統計調査士

最優秀成績賞（S）：柿迫栞緒，栗原俊祐，杉原有輝，高野洋一，高林宏美，田口正樹，長谷川隆志，坂東佑一，松岡奈津紀，山本圓

優秀成績賞（A）：石井正己，伊藤優一，尾瀬祐介，加藤真二，島田和也，下村直輝，終夜太郎，杉本陽太，鈴木信弘，高田慎太郎，竹内真雄，東海林岳寛，田中巧，天満裕孝，中村忠嗣，浜田泰宏，尾藤皓太郎，広瀬俊輔，藤林健太，古屋彩子，星智久，松原悠，御木正大，宮崎大輔，安井康平，渡邊拓海

専門統計調査士

最優秀成績賞（S）：石井正己，加藤大貴，小出慶介，田名網規雄，櫃本尚岐，村上陸人，吉村悠平

優秀成績賞（A）：石橋優一，植松孝博，衛藤義隆，小川大貴，栗原俊祐，浜田泰宏，水野仁，山田奈実

データサイエンス基礎

最優秀成績賞（S）：岡本正博，親川翼

優秀成績賞（A）：佐藤豪，玉留智輝，徳永備久，野田雛実，藤尾壮，水野拓巨

データサイエンス発展

最優秀成績賞（S）：鈴木孝太郎，徳永備久，鋒山凌也

優秀成績賞（A）：岩井佑太，高橋良希

5. 統計検定合格者の声

照井 伸彦（日本統計学会会長）

川崎 能典（日本統計学会理事長）

準1級

星 陽介さん（丸善石油化学株式会社）

本質の理解を

私は情報システム部門に所属しており普段は社内システムの企画・推進を行っています。昨今のデータ分析・活用の重要度の高まりから当社でも統計検定は自己研鑽の一環として推奨されており，また私は大学時代に数学が専攻だったこともあり統計検定に興味を持ち受験しました。

試験対策としては「統計学実践ワークブック」が主体でしたが，背景知識として求められる微積分や線形代数は学生時代の参考書や Web サイトで調べて勉強していました。特に線形代数は，行列や固有値・固有ベクトルの計算ができるだけでなく，幾何的な意味まで自分で説明できるよう

勉強しておくとも一層理解が深まると思います。本に書いてあることを理解できないからと丸暗記するのではなく，自ら図を描いて意味を考えたり試行錯誤してみる姿勢が本質を理解するためには大事です。計算はコンピュータで代用できますが，背景知識やイメージを具体的に説明できることは後進となる DX 人材育成のためにも有効かと思います。与えられた問題を解くために立式して計算する，というだけではなく，幾何的な意味も含めた豊かなイメージを持てるように納得いくまで調べることをオススメします。

現在どの企業でも DX 推進による業務改革は大きなテーマであり，DX 人材の活躍の場が今後より一層増えていくと考えています。そのため，合格を目的とした勉強だけではなく（合格すること

も大事ですが)、本質的な理解に重きを置いた学習が将来的な価値につながると思います。

2級

島田 和也さん(公務員)

社会人になってから触れる統計

私は高校・大学で統計を学んだことがなく、また社会人になってからも現在の部署に配属されるまで統計に触れたことはありませんでした。

それが現在の部署に配属されてからは一転して毎日統計の作成に携わるようになり、時折回覧される広報物で統計検定の存在も知ることとなりました。

今回統計検定を受験したのは、実務については日々業務を行っていく中で知識・経験を少しずつ養うことができるものの、統計主管課の職員としてやはり高校・大学で扱うような基本的な統計学も理解しておきたいということが理由でした。なお、級として2級を選んだのは、書籍だけでなくネット上の教材も充実していたためです。

受験に当たっては、まずWebサイトの「統計学の時間」を通読し、分からない部分についてYouTubeの動画で補強するという勉強の仕方を取りました。その後、実際に過去問を2011年から最新年まで2〜3回繰り返し解き直しました。

過去問の解き始めは合格点の半分正答するかどうかというレベルでしたが、過去問を繰り返すうちに問題に慣れていきました。その結果、ありがたいことに当日受けた問題との相性もあってか優秀成績者をいただくことができ、勉強の甲斐があったと大変嬉しく思います。

統計の知識は、仕事の内容にかかわらず、データを感情や思い込みに依らず客観的に読み解くための大きな武器だと思います。受験で得た統計知識を忘れてしまわないよう今後も勉強は続けていきたいです。

3級

山名 義宣さん(メーカー勤務)

新たな知識が導く更なる自己研鑽

業務でデータ分析を行う機会が多く、統計学の知識を身に着ける必要性を感じていました。

統計検定は、社内で取得を推奨されている資格だったこともあり、自己研鑽を兼ねて受験いたしました。学生時代に学んだ内容だったのですが、すっかり忘れていることも多く、不安を感じつつ勉強を開始しました。

しかし、試験対策としては、公式テキストならびに過去問集を用いた学習で十分でした。しっかりとテキストの中身を理解することで、合格するために必要な知識を得ることが出来ます。

受験を通して感じたメリットは、身に着けた知識を業務に活用することで、自らのデータ分析内容に説得力を出せるという点です。これは、日ごろ説明資料を作ることが多いビジネスパーソンにとって、大変嬉しいことだと考えます。

また、勉強した内容を業務で活用することで記憶も定着し、さらなる自己研鑽へのモチベーションにも繋がります。

今後、あらゆる立場においてデータ分析のスキルが要求されることが予想されます。そのため、統計検定を通して身に付く知識は、製品開発や研究職、品質保証といった技術職のみならず、営業やマーケティングといった部門の方にとっても必須になると考えます。

3級で満足することなく、2級以上の合格を目指し学習を継続していきます。

統計調査士

中村 紘士郎さん(株式会社RJCリサーチ)

統計調査士の資格を持った者が社内にいる！

マーケティングリサーチの会社に勤務しております。業務に活かせる資格はないか先輩に相談したとき、教えてもらったのが「統計調査士」でした。

仕事上、統計との関わりは深いのですが、「難しそう」というイメージからしっかりと勉強できていませんでした。統計調査士検定に合格すれば、業務に活かせるレベルの統計知識が身につくのではないかと思ったのが受験の動機です。

受験に当たっては公式のテキストを用いて学習し、問題集に繰り返し取り組みました。また、問題集を進めていくうちに「統計法の知識も不可欠である」と感じ、統計法も参照するようになりました。勉強期間としては約半年間で合格することができました。

「統計調査士の資格を持った者が社内にいる」ことを入社の競争参加資格に定めている企業も多く、自分の市場価値が上がったようで嬉しく思います。

近年はデータというものが重要視されるようになり、その価値はますます高まっていくと考えていますが、データの情報源や収集方法まで重視されている方は多くないのかなと思います。さらなる情報化社会に向けて情報リテラシーを高めるため、統計調査士、統計検定はすべての方におすすめできる資格だと思いました。

統計調査士の勉強を進めていくうちに、散布図に興味を持ちました。さらに実用的な知識と能力を得るため、専門統計調査士も挑戦してみたいと思います。

専門統計調査士

衛藤 義隆さん（愛西市立永和中学校）

40年の教職人生を経てからのチャレンジ

私が統計と出会ったのは、大学の卒論で教育統

計を扱った時でした。その時は卒論を完成させるのに精一杯で、深く理解しないままt検定やF検定を使っていました。あれから約40年の教職人生を経て、定年を迎える前にもう一度統計学を学び直そうと思い勉強し始めたところ、その面白さや奥深さにどんどんのめり込んでいきました。せっかく勉強したので力試しをしようと初めにチャレンジしたのが「統計検定2級」でした。公式テキストや問題集などを使って繰り返し学習して試験に臨みましたが、とても難しく、時間に追われ、ぎりぎりのところで何とか合格することができました。

その後、貴協会のWebページで「統計調査士」という資格試験があるのを知り、これまでの学習を生かしてチャレンジすることにしました。公式問題集は現在廃版になったものも取り寄せ、過去5～6年分をほぼ完璧に答えられるまで学習しました。おかげさまで、こちらの方は「統計調査士」「専門統計調査士」とも優秀成績賞をいただき、大変うれしく思います。今後さらに、「データサイエンス基礎」にもチャレンジしてみようと思います。

学びに年齢は関係ないと思います。これからの生涯にわたって学び続けながら、学ぶって楽しいことなんだということを子どもたちにも伝えていきたいです。

6. 理事会・委員会報告（2023年7月1日開催）

一般社団法人 日本統計学会 理事会

日時：2023年7月1日（土曜日）

午後1時00分～午後1時10分

場所：東京理科大学経営学部5階会議室

ハイブリッド出席型バーチャル理事会として実施

Zoom（ミーティングID：823 3856 4299）

理事の総数 14名 出席理事の数 11名

監事の総数 3名 出席監事の数 1名

出席者：

理事：照井伸彦会長，川崎能典理事長，小山慎介（庶

務），伴正隆（庶務），吉田靖（会計），増田弘毅（JSD），原尚幸（会誌編集和文），小西葉子（広報），高部勲（大会・企画・行事），荒木由布子（国際），植木優夫（渉外）

（以上11名，括弧内は役割分担）

監事：樋口知之

欠席者：瀬尾隆（渉外），鎌谷研吾（国際），竹内光悦（教育），大森裕浩（監事），山下智志（監事）

第1議案 常設委員会における委員の追加について

(資料1)

川崎理事長より、資料に基づき、常設委員会における委員の追加を提案し、審議の結果、承認が得られた。

・企画・行事委員会

白川清美委員を追加した。(2023年7月1日付)

・学会活動特別委員会

赤谷俊彦委員、加藤昇吾委員、川崎能典委員、西山慶彦委員、樋口知之委員、南和宏委員、山本義郎委員を追加した。(2023年7月1日付)

・学会組織特別委員会

上野玄太委員、川野秀一委員、西郷浩委員、酒折文武委員、清水誠委員、高部勲委員、田畑耕治委員、富澤貞男委員、中西寛子委員を追加した。(2023年7月1日付)

第2議案 常設委員会における委員の再任について

(資料1)

川崎理事長より、資料に基づき、常設委員会における委員の再任を提案し、審議の結果、承認が得られた。

・学会活動特別委員会

青嶋誠委員、足立浩平委員、鎌倉稔成委員、栗原考次委員、竹村彰通委員、椿広計委員、廣瀬慧委員、南美穂子委員、渡辺美智子委員を再任した。(2023年7月1日付)

・学会組織特別委員会

會田雅人委員、岩崎学委員、大森裕浩委員、狩野裕委員、川崎茂委員、栗木哲委員、瀬尾隆委員、山下智志委員、美添泰人委員を再任した。(2023年7月1日付)

第3議案 会員の入退会 (回収資料)

川崎理事長より、回収資料に基づき、入退会希望者を紹介し、審議の結果、承認が得られた。

以上

一般社団法人 日本統計学会 委員会

日時：2023年7月1日(土曜日)

午後1時10分～午後2時5分

場所：東京理科大学経営学部5階会議室

ハイブリッド出席型バーチャル委員会として実施

Zoom (ミーティング ID : 823 3856 4299)

出席：理事11名、監事1名、委員0名、計12名

照井伸彦会長、川崎能典理事長、小山慎介、伴正隆、吉田靖、増田弘毅、原尚幸、小西葉子、高部勲、荒木由布子、植木優夫、樋口知之(監事)

欠席：瀬尾隆、鎌谷研吾、竹内光悦、大森裕浩(監事)、山下智志(監事)

<報告事項>

1. JJSD 支援委員会

増田委員長より、JJSD の編集状況と今年の投稿状況について報告がなされた。

2. 和文誌編集委員会

原委員長より和文誌の編集状況について報告がなされた。

3. 大会委員会

高部委員長より、今回報告すべき大きな動きは特段無いことが報告された。

4. 企画・行事委員会

高部委員長より、春季集会についてある程度内容が固まってきているので、引き続き集会に向けて進めて行く旨報告された。また、川崎理事長より立正大学の白川清美先生が委員として追加されたことが報告された。

5. 庶務委員会

小山委員長より、資料に基づき、2023年度統計関連学会連合大会における企画セッションについて報告がなされた。また、下記2点の後援を承諾した旨、報告がなされた。

・第8回日独分類シンポジウム

主催：日本分類学会、北海道大学情報基盤センター

・第10回青森県統計教育セミナー

主催：青森県

6. 広報委員会

小西委員長より、会報(196号)の準備状況について順調に進んでいる旨、報告がなされた。Webの更新について、日本語ページについては学会誌、役員、委員の更新が済んでおり、次いで英語ページの更新作業を進めている。

7. 国際関係委員会

荒木委員長より、韓国釜山の釜慶大学で開催された、The Korean Statistical Society Summer Conference 2023, KSS-CSA-JSS Joint Session: Young researchers' session に

において講演者に滞在費・旅費の補助を現金にて渡した旨の報告がなされた。

8. 渉外委員会

植木委員長より、JJSD 科研費による JJSD 論文 1 件のオープンアクセス費支払いを進めている件、研究成果公開促進費における代表者交替の手続き中である件、さらに科研費での若手研究者への旅費補助がなされた件について、報告がなされた。

オープンアクセス論文：

DOI number: 10.1007/s42081-023-00209-y, Article title: Machine learning and the James–Stein estimator, Author name: Bradley Efron, 3289US ドル

9. 統計教育委員会（資料3）

竹内委員長が欠席につき、小山理事が資料に基づき

報告をおこなった。

10. その他

なし

<審議事項>

なし

今後の予定

2023年9月3日（日）18：30

役員・代議員協議会：オンライン開催（Zoom）

2023年10月6日（金）18：00

理事会：開催形式未定

2023年11月17日（金）18：00

日本統計学会春季集会準備会議：開催形式未定

2024年2月17日（土）13：00

理事会：開催形式未定

7. 2023年役員・代議員協議会記録

一般社団法人 日本統計学会 役員・代議員協議会

日時：2023年9月3日（日）

午後7時00分～午後8時38分

場所：京都大学経済研究所 1 F 会議室

ハイブリッド出席型バーチャル協議会として実施

Zoom（ミーティング ID：853 3857 9781）

参加人数：40名

議題

1. 会長挨拶
2. 理事および委員の交代について
3. 連合大会中の日本統計学会関連セッションについて

4. 第18回春季集会について

5. 科学研究費の取得について

6. 統計検定について

7. 統計エキスパート人材育成プロジェクトの現状報告と日本統計学会への感謝と検討依頼

8. その他（質疑応答、情報提供等）

・理事会報告

・委員会報告

・赤池メモリアルレクチャー賞の今後の運営について

・社員総会の招集通知の電子化について

・会長選挙に関する検討

・今後の予定

8. 博士論文・修士論文の紹介

最近の博士論文・修士論文を紹介いたします。

(1) 氏名 (2) 学位の名称 (3) 取得大学 (4) 論文題名 (5) 主査または指導教員 (6) 取得年月の順に掲載いたします。

修士論文

● (1) 渡邊宏大 (2) 修士（理学）(3) 千葉大学 (4) Robustness of Principal Component Analysis with Spearman’s Rank Matrix (5) 内藤貫太 (6) 2023年3月

● (1) 山添滉弥 (2) 修士（理学）(3) 千葉大学 (4)

9. 新刊紹介

会員からの投稿による新刊図書の紹介記事を掲載します。

●劉言・蛭川潤一・柿沢佳秀(編)『Research Papers in Statistical Inference for Time Series and Related Models: Essays in Honor of Masanobu Taniguchi』Springer, 2023年6月, ハードカバー: 28,599円 /

ソフトカバー: 4,999円

内容紹介: 本書は全26章, 570頁からなる論文集である。時系列およびそれに纏わる数理モデルの統計推測を主眼に置き, 国内外で活躍する研究者が執筆。様々な角度から統計理論・手法が取り扱われ, 最新の話題も豊富である。

10. JSS Research Series in Statistics からの新刊情報

日本統計学会編の書籍シリーズ JSS Research Series in Statistics からの新刊情報を掲載します。

●Rizky Reza Fauzi・前園宜彦『Statistical Inference Based on Kernel Distribution Function Estimators』Springer, 2023年6月, 冊子体: 49.99ユーロ
内容紹介: 本書は, ノンパラメトリックな手法であるカーネル型分布関数推定量を利用した統計的推測の改善法を紹介している。特に, 確率点や平均余命関数の推定, 及びノンパラメトリック検定について議論している。

●後藤 佑一・長幡 英明・谷口 正信・Anna Clara Monti・Xiaofei Xu『ANOVA with Dependent Errors』Springer, 2023年7月, 冊子体: 49.99ユーロ

内容紹介: 時系列データに対する一元・二元配置分散分析を紹介。群の均質性と相互作用の存在の検定に焦点を当てており, 相関群・無相関群, 固定効果・ランダム効果, 多次元・高次元など, 様々な設定下の解析を網羅している。

11. 学会事務局から

学会費払込のお願い

2023年度会費の請求書が会員のお手元に届いていることと思います。会費の納入率が下がると学会会計に大きく影響いたします。速やかな納入にご協力をお願い申し上げます。便利な会費自動払込制度もご用意しています。次の要領を参照の上, こちらもご活用下さい。また, クレジットカードでの学会費払込も受け付けております。お申込みは学会ホームページよりお願いいたします。(https://www.jss.gr.jp/fee/).

学会費自動払込の問合せ先

学会費自動払込問合せの旨とともに, 氏名と住所を以下にお伝えください。手続きに必要な書類が送付されます。

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6
能楽書林ビル5F
公益財団法人統計情報研究開発センター内
日本統計学会担当
Tel & Fax : 03-3234-7738
E-mail : shom@jss.gr.jp

訃報

次の方が逝去されました。謹んで追悼の意を表し、御冥福をお祈り申し上げます。

佐竹 光彦 会員

入会承認

岩佐哲也, 桐島功希, 相良博喜, 佐藤倫治, 野村亮介, 二見太 (敬称略)

退会承認

鈴木莞司, 西島啓二, 西山茂, 陸路正昭, 山中高光, 協和キリン株式会社 (敬称略)

現在の会員数 (2023年10月10日)

名誉会員	12名
正会員	1,372名
準会員	8名
学生会員	67名
総計	1,459名
賛助会員	17法人
団体会員	8団体

12. 投稿のお願い

統計学の発展に資するもの、会員に有益であると考えられるものなどについて原稿をお送りください。以下のような情報も歓迎いたします。

●来日統計学者の紹介

訪問者の略歴、滞在期間、滞在先、世話人などをお知らせください。

●博士論文・修士論文の紹介

(1) 氏名 (2) 学位の名称 (3) 取得大学 (4) 論文題名 (5) 主査または指導教員 (6) 取得年月をお知らせください。

●求人案内 (教員公募など)

●研究集会案内

●新刊紹介

著者名、書名、出版社、税込価格、出版年月をお知らせください。紹介文を付ける場合は100字程度までとし、主観的な表現は避けてください。

●会員活動紹介 (叙勲・受章、各種受賞等)

できるだけ e-mail による投稿、もしくは、文書ファイル (テキスト形式) の送付をお願い致します。

原稿送付先：

〒100-8901

東京都千代田区霞が関 1 丁目 3 番 1 号

経済産業省別館11階

独立行政法人経済産業研究所 小西 葉子 宛

E-mail: koho@jss.gr.jp

(統計学会広報連絡用 e-mail アドレス)

- 統計学会ホームページ URL :
<https://www.jss.gr.jp/>
- 統計関連学会ホームページ URL :
<http://www.jfssa.jp/>
- 統計検定ホームページ URL :
<https://www.toukei-kentei.jp/>
- 住所変更連絡用 e-mail アドレス :
meibo@jss.gr.jp
- 広報連絡用 e-mail アドレス :
koho@jss.gr.jp
- その他連絡用 e-mail アドレス :
shom@jss.gr.jp